

「生かされあうものとして」

鈴木 真理

昨年の三月、私の祖母が亡くなりました。祖母は、三十年前からパーキンソン氏病という難病を患っていました。パーキンソン氏病とは、手足が不自由になり体が震えて立てなくなったり文字が書けなくなったりする進行性の難病です。言葉も出にくくなり、腰も曲がって、思いのままに生活することが次第に困難になっていきます。

祖母は若い時、看護師や看護師学校の先生をしていました。また、老後は祖父とともに文房具屋を営み、地域の子どもやお母さん達の良き相談相手として慕われていたそうです。

しかし、私の記憶の中にある祖母はすでにパーキンソン氏病にかかっており、不自由な体で腰も曲がり、手足も震えていました。それでも病状が良い時は私たちとトランプなどをして遊んでくれましたが、時がたつにつれてカードをめくるのがだんだん難しくなっていました。祖母はそんな不自由な体になっても何とかしてみんなの手伝いがしたいと、曲がった体で食器を洗おうとして倒れたことも何度もありました。

「手伝わなくてもいいからじっとして。」

母に叱られても叱られても、祖母はいつも何か自分にも出来ることを探していました。座ったままできる食器拭きや洗濯物をたたむことなどを、普通の人の何倍もの時間をかけてやってくれました。私や母が悩んだり落ち込んだりした時は、そばに座って話を聞いてくれました。体が不自由なので何をやるにもあまり上手ではなかったし、相談しても必ずしもの確な答えが返ってくるわけではありませんでしたが、祖母がそこに共にいてじっと話を聞いてくれることで何か安心したものでした。

あらゆる面で不自由な祖母の世話をしてくれていた頼りの祖父に突然先に逝かれ、人の世話にならなくては生活できなかつた祖母にはいろいろな意味での辛さがありました。「運命だからしょうがないね。」と呟きながらその辛さに耐えて、なんとか懸命に生きようとしている祖母の姿は、私たちに勇気と希望を教えてくださいました。私や兄が何かで祖母を助けてあげると祖母はいつも「ありがとうね。ありがとうね。」と何度もお礼を言って、感謝して

くれました。そんなとき私たちはまるで自分が祖母を助けているように思っていました。よく考えると、本当は私たちの方が「ありがとう。」とってもらえることで、たくさんたくさん力をもらっていたことに気づきました。晩年の祖母は目に見える形で立派なことはあまり出来ていなかったけれど、家族や人々の愚痴の聞き役となり、不自由な体でさまざまな苦しみに耐え、みんなに感謝しながら一生懸命生きること、たくさんのかたちを私たちに与えてくれたのです。

「淡い花は母の色をしている。弱さと悲しみが混じりあった温かな母の色をしている。」

体育の教師として体操の指導中に事故にあい、手足の機能が失われた星野富弘さんの詩です。私の祖母の花も決して華やかなものではなかったけれど、その淡さの中に深い祈りと大きな愛がこめられていたと感ずります。

世の中には祖母のように目に見える形では無力に見える方々がいらっしやいます。私たちは、ともするとそんな方々のことは後回しにして、元気で自信満々な方々のほうにばかり目を向けがちです。

しかし、ふだん私たちが忘れがちな優しい心や目に見えない幸せを教えてください。このように一見力がないように見える方々の愛と勇気なのではないでしょうか。

「無力なものは愛を引き出す。」という言葉聞いたことがあります。私たちは祖母のように一見無力に見える存在からこそ愛を引き出してもらっているのだと思います。そう考えると、人は皆お互い様であり、人間はお互いに生かされあっているのだと思っています。

人権尊重というと何かとても立派なことのように感じますが、本当は「どんな人もその存在そのものが大切で、互いに支えあって生きていくもの。」という当たり前のことなのだと思います。一見無力に見えても人は皆、目に見えないところで色々なことを与えあい、支えあっている。何かができるできないよりも、その存在そのものがかけがえのないものとして大切なのではないでしょうか。

弱さと悲しみを抱きながらも精一杯に生きた淡い花のような祖母を思いながら、私も何気ない生活の中で、互いに「生かされあうもの」として、目に見えないことを大切に生きていきたいと思っています。